

第7章 関係資料

第2節 運営指導委員会記録

担当：森藤 知也

第1回運営指導委員会

日時 令和5年9月29日(金) 16:00～17:00

場所 神戸市立六甲アイランド高等学校 小会議室

出席者(敬称略)

兵庫県立大学	鈴木 武	大阪教育大学	仲 矢 史 雄
神戸市立青少年科学館	和田 智 明	シスメックス株式会社	吉 田 智 一
奈良国立大学機構	西 村 いくこ	甲南大学	茶 山 健 二
甲南大学	臼 井 健 二	神戸市企画調整局	藤 岡 健
国立研究開発法人科学技術振興機構	三ツ井 良 文	神戸市教育委員会	西 山 敏 弘
神戸市教育委員会	長谷川 伸	神戸市教育委員会	橋 場 弘 和
神戸市教育委員会	鴛 海 伸 一	校長	藤 田 博 久
教頭	流 郷 隆 治	教頭	西 本 祥 子
教員	西 村 介	教員	高 橋 健 太
教員	森 藤 知 也	教員	福 田 直 起
教員	岩 本 哲 人	教員	吉 川 優 太
教員	梅 村 佳 史		

令和5年度 SSH の取組についての報告

○各授業についての報告と課題(一部抜粋)

- ・理数探究 …今年度より新カリキュラムとなり、従来は2・3年次の2年間かけて実施していた課題研究を、2年次で完結させることとなった。総授業時数は変わらないが、少ない活動時間と少ない専門知識で結果を出すことが難しい。生徒が自主的に放課後等を使って、実験活動を行うほどの余裕もなく、どのように探究を深めるかが課題。
- ・SSH 神戸学…1年次のプレ神戸学のテーマが、2年次で系・コースに所属してからのテーマに結びつかない場合が多い。各系・コースのニーズに合った外部との連携方法の確保も課題。
- ・国際共同研究研修…海外の連携先との共同研究の進捗が思わしくない。昨年度の運営指導委員会にて、先方に来日してもらうことを提案いただいたが、今年度の来日が先方都合で取りやめになってしまった。連携先の再選定も視野に、今後の活動方針の検討が必要。

○SSH の事業報告と事業の課題

- ・特別講義…昨年度から校内だけでなく、神戸市立中学校と兵庫県下の高等学校への案内を実施。平日実施の行事は外部からの参加が難しいという意見があり、今年度は夏季休業中に実施した特別講義2件について、校外への案内を行った。いずれの特別講義も、校外から定員を超える申込みがあり、校外の生徒でも参加可能な時期の特別講義であれば、校外と連携した特別講義の実施の需要があるのではないかと考えている。
- ・教員研修…今年度新たに着任された先生方を対象に、探究活動の進め方についての研修を実施。
- ・事業課題…働き方改革の観点から、行事の精選が必要。精選の基準をどう設けるかが課題。

○運営指導委員の方からの意見や助言

・課題研究においては、量をこなすのではなく、各々の現象や取組に対して「調査研究」を深めるべきだ。すでに行われている研究ひとつをとっても「なぜこの方法で実験されているのか?」「なぜこのタイトルなのか?」ということを探究するだけでも調査研究を深められる。結果についても、実験で得られたデータに対して、教員がどのように説明するかによって意味合いが変わってくるのではない。

・各学校で行った探究活動のデータベースを作っておくべきではないか。市教委を中心に、神戸市立の高校や県立も含めた範囲で、過去5年分位の探究活動を収集してみると、それぞれの課題研究の共通点が見つかるのではないか。データベースがあると、各校での探究活動において、「ここまではできている」「これはやり直すべき」など、課題や到達点が共有できる。探究課題のテーマを毎回何も無い所から考えるのは難しいと感じる。研究データベースを作ることは大変だが、データベースが一回できたら、その後の探究活動はかなり楽になる。「神戸学」で行っている探究活動についても同様だと感じる。プライバシーや著作権を考慮する必要があるため、全ての研究を公開してデータベース化することは難しいかもしれないが、厳しく言えば検索に引っかからない現状では研究が存在しないのと同義だと感じる。

・研究指導に際しては、生成AIも活用してもいいのではないかなと思う。生成AIには、英語を書くとき添削してくれるようなサービスもある。この作業を生徒にやらせてみてもいいのではないかな。

・先生が生徒をいかにサポートできるかが、研究には大切なのではないかな。探究活動を進める中で、知識的に先生の専門を超えることがあるかもしれないが、先生側が学んでレベルアップしない限り、研究指導をうまく進めることは難しい。評価ルーブリックの報告内で「教員が教員の評価をすること」についての懸念が述べられていたが、教員と教員での評価も実施すればいい。

・海外連携先に関しては、各校に在籍しているALTの先生方が現地のそれぞれのネットワークを持っている場合が多いので、ALTの先生方が集まる会合などで情報を聞いてみるのもいい。

・理科実験のサポートのノウハウや協力先については、各大学に在籍している名誉教授を探せばいいのではないかな。名誉教授と連絡を取ることは、実験のサポートにも取り組んでもらえるチャンスだと思う。

・探究は「研究」ではない。専門性がそこまで必要なのかは疑問である。専門性を高めることよりも、レポートや報告の形式が整っているかどうかが重要である。ポスター発表にも参加したが、テーマは着眼点もよく、専門的な範囲まで探究活動を実施しようとしているように感じた。内容面については現状で十分ではないかなと思う。質疑応答の様子も、1年次や先生方からの質問が、専門的に見てもいい質問と思うものが多かった。

・生徒のポスター発表・スライド発表を見て、自分のやりたいことを素直にテーマにしていた点は評価できる。生徒が独創的に探究活動をやっているという感想をもった。高校での課題研究の成果は、結論や結果の良し悪しではなく、生徒のモチベーションに左右されると思う。大学のように高額な費用を投じて探究を行うのではなく、生徒の気付きを大事にしながら探究活動を進めてほしい。

・探究の質を上げるという観点でいえば、大人の目線が入っていないところが多いような気がした。例えば、スライドやポスターに出ているグラフの単位は何か、など、小さな気付きを教員が生徒に示すだけでも探究の質は上がると思う。

・探究活動で使えるビックデータとしては、神戸市ではオープンデータを配信している。どのようなデータを必要としているか等、相談いただければフォローできるので、気軽に問い合わせしてほしい。また、神戸市では市内の21大学と連携しており、こちらも活用してもらいたい。さらに、神戸市と包括連携をしている会社も10社程度ある。企業との連携が必要な場合も、対応できることがあるかもしれない。